

認知症及び身体機能障害を有する患者へのスポーツ回想法

○秋田恵梨花¹⁾，藤田依久子²⁾，新井健一³⁾，三浦孝仁⁴⁾，早田剛⁴⁾，前川真姫⁴⁾，宮本彩⁴⁾，#小林正宗⁵⁾，#勝方正宗⁶⁾，石坂珠緒⁷⁾，#山下はるな⁸⁾，#名倉鮎美⁹⁾，片桐夏海⁴⁾，小澤尚子⁴⁾，#鈴木聡一²⁾，#杉浦正隆⁸⁾，#大日方重利⁹⁾

(¹⁾医療法人ブルースカイ松井病院，²⁾山陽学園大学総合人間学部生活心理学科，³⁾日本大学生産工学部，⁴⁾IPU・環太平洋大学体育学部／スポーツ科学センター，⁵⁾メディアファーム株式会社，⁶⁾国際高等専門学校，⁷⁾長野県松本県ヶ丘高等学校，⁸⁾静岡産業大学クラブ，⁹⁾磐田市立磐中部小学校，¹⁰⁾NPO 法人コミュニティ総合カウンセリング協会)

背景

現在の日本は、世界の中でも超急激な高齢化率を迎え4人に1人が65歳以上の社会となり、「認知症500万人時代」といわれて久しい。認知症の人が我々の身の回りの社会の中に身近に存在する社会を意味している。厚生労働省においては、2025年を目途に高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを、人生の最期まで続けることができるよう地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築を推進している。

研究の目的

本研究では、先行研究（藤田ら，2019）を援用し、スポーツを用いた回想法が、高齢者の心理的健康にどのような効果を与えるか、についてバウムテスト及び質問紙によって、スポーツによる回想法の実施の有無による変化と回想法実施前後における心理的健康度に関し検討することを目的とする。

研究の方法

研究デザイン：介入研究（非ランダム化比較試験）

研究の実施場所：本研究及び調査に同意が得られた医療介護施設X及びYの関係団体

4箇所（P県，O県にて実施）

研究期間：2019年6月～2022年8月

研究対象者：（介入群59名、非介入群98名）

分析対象者は介入群38名、非介入群52名対象は、医療介護施設の利用者で、通常のスポーツ活動に支障がない者（＝健常高齢者）と認知症患者及び身体機能障害を有するもののスポーツ活動に支障がない者とし、両者への回想法を実施。

年齢：65歳以上を目安とし65歳未満にも実施。

結果・考察

バウムテストの空間使用数では、有意に増加したことで、心理的健康度上昇したといえる。非介入群でも質問紙調査で健康的になったとの結果が出ており、バウムテストの空間使用数でも、有意に増加がみられ、こちらも心理的健康度上昇したと考えられる。上述の先行研究が示す通り、筆者らの調査においてもバウムテストでは、質問紙で反映されない変化を捉えられたのではないかと考える。

参考文献

藤田依久子ほか(2019)スポーツにおいて回想法的介入が高齢者の心理的健康に与える効果，中国四国心理学会論文集第52巻